

## 日本が失った二つの教育

水野 正司

### 1 中標津町FMはな「子育て相談室」

私はこの4月から地元のFMラジオで「子育て相談室」という番組のパーソナリティーをさせていただくことになりました。放送は毎週日曜日の朝9時半と夕方4時です。若いお母さん方を対象として「子育てQ&A」や「昭和の子育てに関する思い出話」など30分間で内容を構成しています。先日は地元中標津町の大正時代の子どもたちの写真をスタジオに持ち込んで、「この時代の子育てはどんな感じだったのでしょうか？」という話題からスタートさせました。渡辺京二の『逝きし世の面影』（平凡社）という本をご存知でしょうか。この本には明治初期の日本の子どもたちの様子が描かれています。当時日本を訪れた数多くの西洋人たちが、日本の子どもたちの素晴らしさ、子育ての素晴らしさについて感嘆しながらその様子を描写しています。例えば、この時代の子どもたちは赤い頬に頑丈な体つきをして街中いたるところで一日中遊んでいたようです。街を歩き来する大人は皆子どもたちの遊びを邪魔しないように通り、子どもは遊びに没頭するのが当たり前という様子でした。西洋人のエドウィン・アーノルドは「街はほぼ完全に子どもたちのものだ」と表現しています。ネットーは「日本ほど子供が、下層社会の子供さえ、注意深く取り扱われている国は少ない」と言い、モースは「ニコニコしている所から判断すると、子供達は朝から晩まで幸福であるらしい」と言い、イザベラ・バードは「私はこれほど自分の子どもに喜びをおぼえる人々を見たことがない。子どもを抱いたり背負ったり、歩くときは手を取り」「他人の子どもにもそれなりの愛情を注ぐ」「父も母も、自分の子に誇りをもっている」と記しています。これらの感想は日本の子どもたちがいかに幸福に育てられていたかを物語るものですが、その「育て方」に対する観察にも興味深いものがあります。ツェンベリは「注目すべきことに、この国ではどこでも子供をむち打つことはほとんどない。子供に対する禁止や不平の言葉は滅多に聞かれない」と書き、モースも「赤ん坊が泣き叫ぶのを聞くことはめったになく、私は今までのところ、母親が赤ん坊に対して癩癩を起しているのを一度も見えていない」と書いています。親が愛情をたっぷりと注ぐところに日本の子育ての特長があったのだと思われます。そして、そのことが単なる溺愛ではないところにも西洋人は驚嘆します。イザベラ・バードはいつもお菓子をを用意して子どもたちに与えていましたが、「彼らは、まず父か母の許しを得てからでないと、受け取るものは一人もいなく」かったと書いています。日本の親は子どもを放任しているのでも溺愛しているのでもありませんでした。没頭させるほど遊ばせていたのも教育で、小さいときから礼儀作法を仕込むことも教育で、当時の親の最大の関心事が「子どもの教育」だったのです。そしてその結果、日本の子どもたちはモースが言うように「世界中で、両親を敬愛し老年者を尊敬すること、日本の子供に如くものはない」というほど親や年長者を敬い、フレイザー夫人が言うように「怒鳴られたり、罰を受けたり、くどくど小言を聞かされたりせずとも、

好ましい態度を身につけてゆく」ように育っていました。同じくフレイザー夫人の次の報告はとても興味深いものがあります。「分別がつくと見なされる歳になると、いずれも6歳から10歳のあいだですが、彼はみずから進んで“主君”としての位を退き、ただ一日のうちに“大人”になってしまうのです」。

これが明治に見られた日本の伝統的子育てです。恐らく、スタジオに持ち込んだ写真の大正時代のこの子どもたちも、そうした文化の影響を残したまま、優しく、たくましく、大切に育てられていたのではないかと想像するのです。

——番組では「古き良き日本の子育て」をテーマにメッセージを発信しています。

## 2 「心の教育・女性フォーラム in 横浜」

6月2日に「心の教育・女性フォーラム」に参加しました。登壇されたのは高橋史朗氏、向山洋一氏、有村浩子氏、義家弘介氏、司会は山谷えり子氏でした。テーマは「親学を通して家庭教育を考える」です。私はこの日の向山洋一氏の主張をノートにまとめました。向山氏は私の師匠です。師匠がどんなことを頭に描き、今何をしようとしているのかを把握しておくことは、弟子の私にとって最も重要な作業です。私はこの日の向山氏の主張に「現在の日本の教育を俯瞰し、私たちの立ち位置を確かめる」という表題をつけて次のようにまとめました。

- (1) 明治維新の前後、多くの西洋人が日本の教育・子育てを絶賛した。
- (2) その教育構造・教育文化こそ、日本が近代国家へ成長できた根本条件である。
- (3) ところが第二次大戦後、その教育構造・文化を、日本は失うことになる。
- (4) 失ったものは大きく二つ。教師教育と家庭教育。
  - ①師範学校を無くした → 一般教養とヨーロッパの教育思想を学べば誰でも教師に
  - ②家庭教育を抜いた教育基本法を作った → 国は家庭教育に立ち入らないという風潮
- (5) その一つを正したのが安倍内閣の時の新しい教育基本法である。

第十条 1 子育ての第一義的責任は親にある。

2 国および公共団体は支援しなければならない。

- (6) しかし、これは基本法である。具体化する動きが必要である。

例：家庭教育支援法を国会で定め、その法律に予算がつき、各都道府県で条例化され、各地域で具体的な支援が行われていくといったように。

- (7) 今、国会では超党派で議員連がつくられ、日本の教育の歪みを正そうとしている。
- (8) 今、日本の教育は音を立てて崩れている。現象を具体的に語れなければならない。

「新型学級崩壊」「発達障害」「学力低下」

このノートにある前半の4項目は明治以降の教育の動きを俯瞰するものです。

戦後の日本は、教師教育と家庭教育を放置したまま今日に至っているわけです。

現在、学校教育、家庭教育に歪みが生じているとするならば、教師、親に何か欠けて

しまっているのではないかという視点を持つことが、歴史上・制度上の自然な検証の仕方でしょう。北海道教育の検証に当たっても同じです。日本が失ってしまった二つの教育について、いくつかの情報を補足して本稿を終えることにします。

### 3 日本が失った二つの教育・その一「教師教育」

戦後の教員養成大学は「学」と「芸」を教えず、一般教養を身につけるだけのリベラルな世界となりました。従って、一般教養だけを身につけた若き教師が日本中で教壇に立つこととなり、校内暴力や学級崩壊やいじめや不登校など様々な問題が毎年のように噴出するようになりました。また、教師自身も心の病などを抱え、悩み苦しむようになりました。向山洋一氏は「新卒教師のおよそ9割は学級が荒れる」と主張されていますが、これは決して大袈裟な表現ではなく、現場の実感です。一般教養だけでは子どもたちに学力を身につけたり心の教育を施したりするのが困難なのです。伊与田覚氏は『己を修め人を修める道』（致知出版）の中で「人の指導には学・芸が欠かせない」と主張されています。「学」とは即ち「人間学」です。人間学とは、人に影響を及ぼすほどに自己を修めるための学問（修己治人の学）を言います。この「修己治人」は「修己修身（自分をきちんと修める）」の上にある学問です。かつての日本の教育は、尋常小学校（常識を修める段階の学校）において「己」を修め、中学、大学と進むにつれて「人」を治めるため教育（＝人を治めるために己を修めるというレベルの高い教育）を受けていたわけです。ですからまさに「教職は聖職」であり、教師の道は教え子に範を示さねばならぬ厳然たる世界だったと言われています。一方の「芸」についてはどうでしょうか。伊与田氏は、「芸」とは知識や技術を身につけることを言うと言っています。これは人間学に対して時務学と呼びました。人にものを教えるときには知識や技術が不可欠です。教師は知識や技術を身に付けなければならないのです。また、知識や技術は時代の移り変わりによって変化・進歩するものです。常に新しいものを学ぶ必要があります。それが時務学です。人を指導する場合には「学（人間学）」と「芸（時務学）」の二つを修めなければならないというのが、かつての日本の教師教育の根幹だったのです。私は戦後の教員養成大学の出身です。一般教養のみで教壇に立った教師です。人間学も時務学もまったく学んで来なかったと言っているでしょう。ですから私も「頼りない新卒教師」として子どもからも保護者からも管理職からも心配されました。もちろんそのような自分の身を日本の歴史に位置づけて俯瞰することなどはできず、ただ「学級・授業をなんとかしなければ」と、もがいていただけでした。

### 4 日本が失った二つの教育・その二「家庭教育」

我が国の家庭教育を再建しようとする動きの中心に明星大学の高橋史朗教授がいらっしゃいます。この運動は「親学」といい、「親が変われば子どもが変わる」を合言葉にして、

全国各地で「親としての学び」と「親になるための学び」を推進しています。私は高橋史朗先生のもとでこの親学を学び、先日6月24日に「親学アドバイザー」に認定されました。私にはアドバイザーとして親学のことを正しく伝える役目があります。5月のこととなりますが、親学に対する誤解が大阪を中心に湧き起こりました。大阪府内を中心に活動する団体が「大阪維新の会」の家庭教育支援条例案に対して「学術的根拠のない論理に基づいている」として撤回を求めてニュースとなりました。この時、案のもとになっているのが高橋氏を中心とする親学なのではないかという非難が降りかかってきました。これは大きな誤解でした。熊本大学の高原朗子教授が6月13日付けの産経新聞（山口九州版）でそのことを正しています。概略は次のようです。発達障害の成因は二つあります。一つは脳機能不全に基づく障害です。これは生まれつきの要因ですので教育や愛情などで治療するのは困難です。成因の二つ目は不適切な養育や育児放棄などです。これにより発達に歪みや遅れが生じる場合があります。このような場合も発達障害あるいは発達障害に類似した特性をあらわします。親学が「発達障害は予防・治療できる」と主張しているのはこの後者のことであるというのが高原教授の説明です。これは私から見てもまったくその通りで納得できるものです。しかも、親学では「親の愛情不足が発達障害の原因」とは主張していないにもかかわらず、マスコミが誤って報道してしまったことが関係団体を感情的にさせてしまいました。親学が主張しているのは「小さいときの親子の愛着形成が大切である」ということです。これは昔から日本人が行ってきた自然な形の子育て文化であり誰もが受け入れる主張であるはずですが。このような行き違いがあったにもかかわらず、維新の会側はこの誤解を解説できないまま条例案を発表したために批判を受けました。この一件は維新の会と関係団体との間における行き違いです。しかし、私たちはそれを「行き違い」とだけ捉えて終わらせるのではなく、「発達障害の正しい理解が社会に行き渡っていない」という背景から起きた出来事として捉える必要もあると感じています。現在、発達障害に関する知見を抜きに教育は語れなくなってきました。「第一義的責任は親にある」という家庭教育の規定は、「親がやらなければならない」ということを明確にすることと「その上で親を支援しなければならない」という二つの方向を持っています。ここが整備されなければ教育全体は良い方向に向かっていかないでしょう。高橋史朗氏は言います。「私は、学校教育の現場にずっと関わってきました。政府の臨時教育審議会の専門委員や文科省の国際学校研究委員会の改革論議にも参画しました。その中で、制度を変えれば、法律を変えれば、あるいはシステムを変えれば、子どもは変わるのか、という疑問をもつようになりました。子どもが変わるのは、やはり子どもにふれる教師や親、つまり人ではないか」（『教育トークライン』7月号）。私は高橋氏のこの言葉の重みを、東京に行って実際に高橋氏とお会いすることによって、重く、重く、感じられるようになりました。教師と親。日本はこんなにも大切なものを、いとも簡単に失ってしまったのです。私は高橋氏のこの言葉を胸に、北海道教育の立て直しに微力を尽くす覚悟でいます。拙稿の最後に「三つの現象」を取り上げます。この三つは北海道教育の課題でもあると思っています。

**【新型学級崩壊】**チャイムが鳴っているのに立ち歩いている。その様子を見た人が「休み時間ですか？」と聞くほど複数の子もたちが立って騒いでいる。先生が授業開始の挨拶をするが、頭を下げたのは教師だけで、ほとんどの子どもは立って、座っただけである。注意してきちんとさせようものなら余計ひどくなる。かつては新卒教師や指導力不足教師に見られた現象が、ベテランの教師、主任クラスの教師にも見られ、それがどこの学校でも生じるようになった。原因は多重的だが原因のひとつに就学時健康診断が適切に行われていないという実態がある。法律で定められているにもかかわらず、北海道には全く行われていない地域さえある。

**【発達障害】**すべての教育関係者はこのようなことに答えられなければならない。

(a)「教科書を出して25ページの練習問題の③番をやって、できたらお隣同士で答え合わせをなさい」と言うと、「先生！どこやるんですか？」と聞く子がいる。なぜか。

(b)「遠足の作文を書きます」と言うと、「何書いたらいいかわかんない！」と言ってパニックを起こす子がいる。なぜか。

(c) みんなでかくれんぼをして最初に見つかっただけで、泣き叫んでみんなを困らせてしまう子がいる。なぜか。

このようなことに「適切な理解」と「適切な対応」が求められている。「叱って育てる」では二次障害を引き起こす。「教えてほめる」が改善のための方向である。発達障害に対する適切な理解と適切な対応が、すべての教師に求められている。研修が必要だ。

**【学力低下】**授業中に教科書が使われていない実態がある。低学力の根本原因は放置（教えられていない）という点にある。従って、学力向上の根本方策は「授業中に教える」「授業中に教えている教師を応援する」ということに尽きる。それなくして宿題に頼ったり、補習に頼ったりするのは、川上で汚水を流して川下で水の浄化に努めるようなものである。教師の世界には「教え方」というものがある。①教える…「わかった！」となる（ほめる）②身につけさせる…「できた！」となる（ほめる）③習熟させる…「大丈夫！」となる（ほめる）大事なのは①と②の過程である。ここを家庭に丸投げしてはならない。「教える」のは授業中の教師の仕事である。「身につけさせる」には身についたかどうかの確認が要る。すべての子どもに対し確認が必要だ。これも授業中の教師の仕事である。そして、わかった時、できた時、自信をつけた時に、「すごいなあ」と言ってほめてあげるのが教育である。自主性を重んじるあまりに「できなくてもいい」と言うのは教育の放棄である。低学力の根本原因は算数のノートを見ればわかる。一学期が終わる頃には数冊のノートが使われているはずだ。1冊や2冊というのは教科書を使っていない可能性がある。プリントを使う教師がよい教師ではない。プリントでは教科書を使っていることにはならない（伝習館裁判判例）。プリントは発達障害の子に対する配慮に欠ける。このような根本的な部分にメスを入れなければ学力の問題は解決しない。